

# 日本と世界の未来に備えて

## ——危機の時代における教育と宗教——

1980年代に英米から生まれた「ネオリベラリズム」が「経済的悪影響」だけでなく、深刻な「知的悪影響」をもたらしたことについて、トッド氏は次のように述べる。

〈調子の狂ったこの先進世界では、未来予想が緊急の必要となってきました。しかし、未来予想をするのは、30年前に比べて格段に難しいのです。なぜなら、経済的である前にイデオロギー的・文化的な現象であるネオリベラリズムの力強い擡頭と支配が、社会科学と歴史的考察を荒廃させたからです。

経済主義的な偏狭な歴史観がすべてに浸透し、ついには、アメリカ大陸、ヨーロッパ、中国などの経済史について、研究対象とする国や地域の人びとの教育水準に関心を抱くこともなく本を書く学者までが少なからず現れるに到っています。

宗教的価値と経済的行動の間の相互作用も忘れられました。個人や家族の生活様態は場所と時代により人口の均衡や不均衡を導くのですが、それも忘れられました。経済主義は、たとえ多くのモデルやグラフの後ろに隠れても、知的ニヒリズムのソフィステイクートされた一形態にすぎません。経済主義が、各国のエリート層や政府の知的武装を解除してしまったのです。今日、先進国の誰もが大きな歴史的反転の状況に直面しているというのに——。(略)

現下の歴史的転換は、経済に関する転換である前に、その基盤において家族、人口、宗教、教育に関する転換です。大学の優先的課題の一つは、大学が提示する課程、資金を投入する研究の中に、人類の人類学的要素、宗教、教育、芸術などの変容の内部に経済史を組みこむような経済史へのアプローチを再導入することであろうと思われます。〉

(『問題は英国ではない、EUなのだ』「日本の読者へ」より)

これまで世界史をリードしてきた「西洋」——トッド氏は日本も広義の「西洋」に含める——は、行き詰まりに直面している自らの状況を理解できずに途方に暮れている。それは、経済学が支配的なイデオロギーとなり、すべては「経済」によって決まるという「経済決定論」で「現実」を直視できなくなっているからだ。

この危機の時代を生き抜く上で、どんな「知的武装」が必要なのか。トッド氏が存分に語る。